

【シンポジウム】

テーマ「人間関係づくりを、校区・地域でどのように進めていくか」

シンポジスト

武庫川女子大学大学院	教授	西井 克泰
大阪府教育委員会児童生徒支援課	主任指導主事	古川 知子
松原第七中学校区地域教育協議会	会長	前田 正人
松原第七中学校	教諭	深美 隆司
コーディネーター		
松原市教育委員会教育推進課	課長	前崎 卓

< 研究開発に携わってきたそれぞれの立場から >

西井：本日の公開授業では、ソーシャルスキルを身につける幼児期の段階から、アサーティブな人間関係づくりを目指す中学校3年生までの11年間の、発達段階に応じた場面の特徴が良く出ていた。教授法やファシリテーターとしての役割、振り返りの時間の確保など課題は残るが、思考レベルの変容を伴う行動の変化を今後も期待したい。

古川：府における「いじめ・命に関わる緊急体制」の部署に所属している。『いじめ対応プログラム』の中で、府としては、いじめを乗り越える力として6つの提案をさせていただいたが、自己肯定感や社会的な有用感が根底に座っていなければならないと考える。それらは、家庭や地域での生活体験を通して自然に身につくものもあれば、学校で意図的・計画的に学習しなければならないものもある。第七中学校区の取組とともに学んでいきたい。

前田：個人的にPTA～育成協～地域協と、子ども達を幼稚園時代から見守ってこれている環境にある。地域協議会としてのさまざまな行事や中核となるボランティア活動の中学生へのお願いなども全校集会など直接の場を設けていただいている。子どもをあてにする、頼りにする。動いてくれた子に感謝（ボランティア手帳など）することを自然にやってきたが、そのことの意味づけを自己肯定感、有用感の説明で自分が理解させていただいた。

深美：一昨年に転勤してきたが、たいへんフレンドリー（生徒、先生方ともに）な学校。ファシリテーションがある。6%台だった不登校率が2%台になった原因は、個々の学級、学年における対応だけでなく、不登校生徒支援会議が機能しているので学校全体として先生方が自信を持って生徒に支援できるバックグラウンドがあるから。タイムリーな情報を共有している。また、子どもと教師がつながっていることが、当事者の周りの子どもから見えていることが一番大きい。「いじめはいけない」キャンペーンを張る必要がまったくない。

今後は、校区としての「いじめ未然防止」という課題をいただいたので、それに向けて取り組んでいきたい。

前崎：古川先生から見て、松原七中校区の取組の良さは。

古川：幼～小～中の発達段階に応じたシステム。小6～中1の校種段差（いわゆる中1ギャップ）を埋める取組。本日もコラボレーション授業として、中学生が小学生を迎え入れる取組がされていた。地域で支えている点。先生方の意思の疎通、情報共有ができていないこと。ほっとスペース（不登校校内適応教室）、本日「3年生の生徒で、中学入学後はじめて教室に入れた」という声が聞かれた。

前崎：中学校区で取り組むポイントは。

深美：2年半、一度も教室には入れなかった子が入れたという今の話は、うれしい限り。

同じ土俵を持つだけではだめ。行動に移すことが、すべて。やってみなければはじまらない。子どもの気づきとよく言うが、子どもの気づきに教師が気づいていなければ、子どもにしかけられない。幼・小・中学校間の効果測定（研究紀要44P）など、よほど信頼関係がないとできないことで、これができて本当に良かった。並べてみなければわからない、見えてこないも

のがたくさんある。

前崎：幼～中までの一貫した取組の良さと課題について。

西井：地域ぐるみ、コミュニティ的の発想から生まれた一貫した取組から見えてきたこととして、子どもだけに人間関係づくりを教えればいいのかということそうではなさそう。地域には、地域としての人間関係づくり、連携強化、地域の力の育成があり、学級ではその上に立っての人間関係学科の取組があると考えたい。

ストレッサーへの対処法としての攻撃的コーピングの話が深美先生から出されたが、いじめ、不登校という負の措置やもめごとを全く起こさないというのは無理、できるだけ軽く、初期にどう対応していくかが大事。自律・自立にかかわるスキルのストレス対処は、人と人との関係性の中での自己（確立）と内省的な自己（確立）がある。支えられている、役立っている、自分はここにいて良いんだということが前提になって内省的な自己も形成されていくもの。人間関係づくり（HRS）を通して内省的な自己をどう育んでいけばよいかが課題である。

前田：研究紀要42P、地域と教職員がどういうつきあいを作るか、人間関係学科を地域の人たちにどう伝え、理解してもらうかが地域協議会長としての自分の役割。松原地区協議会総会の場で学校の授業の様子そのままを劇（ロールプレイ）で紹介した。劇を練り上げていく過程で、教職員と地域の間が仲良くなっていくひとつの方法だと思い、頑張っている。

前崎：来年度、文科省指定の最終年度を迎えるにあたり、第七中学校区に期待するものは。

深美：たとえば、パンフレットの11年間の「人間関係づくり」概念図に示した、発達段階に応じたターゲットスキルも、実際にはこのように順を追って育っていくものではないことがわかってきた。さらに研究を深めたい。

前田：4月1日の学校職員と地域のみなさんとの飲み会を、万難を排して継続していくこと。国際文化フェスタが14回目となるが卒業生がボランティアで参加するようになってきたので、同窓会的な場としても展開したい。子どもを褒めましょうというが、今日、授業を提供された先生方を褒めたい。みなさん拍手を。

古川：府としても、子どもたちにどのようにして問題解決力をつけていくか。この第七中校区の取組に学びたい。

西井：地域の力、支え、第七中独自性、松原市独自性をどう出すか、人権をベースにしてどういう力をつけていくか、ずいぶん論議がされてきた。さらにその上に立ちいろいろな力をつけようと、ハードルがどんどん高くなってきている。地域における大人どうしの関係や人間関係学科をどうしようかの段階から、今度は何をしようかへと。古川さんが言われた問題解決能力だが、人間相手のことについては、実は解決できないことのほうが多い。そういう時に、解決できない子に問題を回避してしまわずに葛藤を保持する力、しばらく心の片隅に置いておける力をつけるのが課題と考える。